



第3回 生物野外観察「湿原及び鳥と環境」 令和元年9月29日(日)

目的

- ①湿原の痕跡をめぐることにより、かつての石狩湿原の存在を知る。
- ②大きな環境変化に関わらず、春秋に飛来し続けるマガンを知る。
- ③マガンの保護と農業被害という背反する課題を考える。

場所

- ①美唄市・美唄湿原 ②美唄市・宮島沼

講師：講師 小林 峻さん

参加生徒：4名 引率教員：山岸 陽一、齊藤 圭一

- 観察・調査のポイント
- 湿原の生態系について
- マガンを支える石狩平野と食害について
- マガンの越冬戦略について



▲石狩湿原をフィールドワーク

美唄湿原はミズゴケやヨシなどが3メートルほど堆積してできている湿原です。植物が分解されずに堆積し、水を含んでいるためジャンプをすると地面全体が揺れます。分解されず不栄養化の地表には、食虫植物などがみられます。手つかずの湿原ならではの生態系を観察することができます。



▲宮島沼近辺での落ち糞(もみ)調査

宮島沼はロシアから飛来する渡り鳥であるマガンの中継地です。ラムサール条約に登録されている宮島沼の周辺は水田や小麦など農作地が広がっており、何万羽も飛来するとなると農作物が被害に遭います。中継地として宮島沼を保護することと、農作物を保護することの間に問題が生じますが、その問題の解決に科学的な調査が有効となった事例を、体験を通して学びました。



▲宮島沼に訪れる3万羽を超えるマガン

夕暮れが近くなると、多くのマガンが宮島沼に飛来し、沼で羽を休め、夜を過ごします。前日の観測では3万羽ということでしたが、当日は途切れなく飛来するマガンを観察することができ、おそらく3万羽を超えていたのではないのでしょうか。家族のマガンが空を飛ぶ際の隊形や数の数え方、マガンの特徴などを双眼鏡や望遠鏡を用いて観察しました。